

夏の月

かはぐち

明石土産に、拇指の辛つと這入る位の大きさの可愛陶製の壺を呉る。見ると其可愛の壺の縁に蝸が一匹外側からカラまつて居る。更に注意して見ると、壺の外側に「や」の字が大きく筆太に書かれて居る。尙ほわざわざ讀をすると、「はかなき夢を夏の月」の九字が見えて來た。イヤこいつには擔がれかけたと我ながら悦に入つたことであつた。

實際に、蝸を獲る壺も全く型があつた通りで、唯大きさが違ふまでのことである。通常の蝸壺は徑六七寸高さ小一尺位である。その壺の頸をいはへて其一端から五六尺隔て、又他の壺をくゝりつける。斯ういふ工合に一繩に大凡五六十個もつけておく、之に桐で作つた浮標が長い紐付で付けらるゝ。斯いふ蝸壺の珠數繫の繩を幾條も用意して、小舟に積込み、蝸の來往徘徊する場所に漕ぎ

出て、片端から此蝸繩を沈めておく。すると、蝸共、例の調子で呑氣に餌食を漁りに出懸けてくる。蒼空に流星が飛ぶ時のやうにあの胴の筒を先きにして入手を後に流したやうな振りで、フラリツツ、ヒョイツツと泳ぎながら彼方此方とさまよつて居る中に、不圖、例の蝸壺を發見する。近寄つて内を窺へば、誠に蝸君達には持つて來いともいふべき住宅である。廣海にも此様な頃合な家は今までには見付からなかつた。例合あつても他に同志間にも競争者があつて程よく専用することが出来なかつたが、長生すれば幸なこともあるものかななどと、シタリ顔に壺の中に這入つて見る、又出て見る、誠に自由自在、餘程此家の設計には骨が折れたらう、何しろ便利に出來て居ると、到頭、蝸君一人で一壺を占領する。之にて敵の來襲の心配も先づなくなつたし、新宅の移り心地もよく、何時しかウツラ／＼と夢路をたどる外面は夏の夜の月に照されて海中ながら明るくてすが／＼しい、早や曉け方に近いらしい。

右のやうに新宅にありついた蝸君は決して一人

や二人でない。何れも大恐悦で夢をみて居る、頼母しい夢をゆめみて居る。

此新宅、而かも五六十軒も近所に俄に出来た新宅が、一晝夜を経た後に、意外にも地震の爲か何だか動くやうに蛸君に感ぜらるゝやうになる。段々と手荒く否最初から可成亂暴に新宅を揺すり始めるものがあつた。『夢驚かす狼藉者、扣へろ！』とタシナめても何の甲斐もない。霜を僧門にかける彼蛸君若し執着の汚漬を去り瓢然と雲水に身を委ぬれば廣き海原が唯彼のまゝなるべきを、さりとは之も浮き世なるか、蛸入道非常の立腹、唯今の申渡し相分らず尙は殿堂をゆすぶるに於ては、此方にも相應に覺悟ありて、眞赤となりて其八ツ手を張つて壺の内側より張り裂けんばかりに踏み張り居れば、何時しか壺は水面まで引上げられて漁夫どもの噓々の聲が手にとるやうに聞ゆるやうになる、後れたれども此時尙は勝手次第に壺から逃げ出ることが出来るのに、蛸君益怒つて頑張り居るが爲に到頭漁夫共に壺諸共に安々と船の内に引上げらるゝ、誠に自繩自縛で、自から好んで漁

夫の籠に入る次第も氣の毒にも又滑稽の至である。白石の津々浦々に、此蛸壺の廢物が彼方此方に轉がつて居る、其牡蠣などの附いたのを花瓶にそのまゝ利用した人もある。一間床以上の床の間にならば恰度頓合なものである。

吾輩も始めて聞いた時には、實は聊か驚いた、それは蛸が陸上を駆足で走り廻はることである。泰平の春三月、天氣のノツテリとした日に、海岸に開いた褐色な畑地に春蕎麥の花盛りを見付けて彼章魚共物辭かに磯の岩から匍ひ上つて、頓て彼の短からぬ手を出して蕎麥の花を片端から何とも挨拶せずに頂戴することが往々ある。人間共が來る氣合がすると彼等は八足で逸目散に走り出して海に逃げ込む話であつた。

そこで又蛸壺の應用が始まつた。併し陸上で應用する壺は少し違ふ、第一海のは素焼でよいが、陸では褐色の釉を塗つたスベ／＼したのでなくはないが、陸で用ふのは少くとも尺餘はなくては

ならぬ、此陸上用の蝸壺を例の蕎麥畑の畔に、壺の縁邊が地平面とスレ／＼になる位、否地平面よりは多少低い位になるまでに、壺を地中に上向けに中を空にして埋めおくのである。そうすると蕎麥喰ひに來た章魚共の中で、呑氣な奴は物好きに飛び込んで休息し、さもなくとも蕎麥の御召し上りの眞最中、御無禮ですがとも何ともいはず人間共が不意討に現はるゝと、蝸君もさるもの、左様安くは命を進上出來ぬ、と駈出し、早速の利用、調法至極と、例の蝸壺に一気に駈け込む否落ち込むのである。自から好んで入つたにしろ、追はれて入つたにしろ、何しても入足から先きに入つて而も内部は平滑で何とも力の入れどころがない。何處かに手をかけて身返りしやうにも丸で所謂手懸りが無い、シレッタ身返りとか、モドかしいとかいふのは此様な場合の心理状態をいふのであらう、蝸の壺では何時でも逃げ出ることの出来るのに、蝸君達は「海は我本家だ、誰が本家の本家の此壺から出るものか」と自から威張つて遂に人に攫まれ、陸の壺では流石に一時の宿りと自覺して早

速に逃げやうとしても内が滑かたで且つ深さも遙に違ふので、萬一手出が出来ても壺の縁まで届かない。結局、人間奴に笑ひながら生捕らるゝので蝸共非常に悔しがるといふ噂である。併し此壺から蝸共を出す時、大抵の素人は往々蝸共に逃げらるゝ。何故なれば、棒で突かば棒について上つて駈け出すし、手で攫めば甚だしく例の吸盤で吸ひ付く吸付かれては、痛い苦しい問題は切あき、第一何だか心持の工合のよくないことが世界無類である。斯うなつては蝸の逃げるも何もあつたものでない、寸刻も早く振り拂つてしまひたくて人間が狂ひ出すからである。それで大抵は割合に丈夫な棒で、狙つて先づ蝸を突く、突いたら八足でしがみ着く、着いたら早速引上げてそのまゝ力に任かして岩なり地面なりの堅い面に投げ付けて、先づ弱らして、籠に入るゝのが普通の捕り方である。熟練な漁夫になると、手早く蝸の筒即ち腹のあの袋形になつたところを、クルツとヒツクリ返すのである。斯してかかば海へ放しても最早自から逃げるを得しないで、ユラ／＼足ばかり

りふつて居る。

飽浦崎の内側即ち加太浦の一方に、岩角の現はれた磯がある。其處で女小供が最も簡便に蛸をとつて居る、其法は細いステッキ位の棒一本で岩の罅隙を窺つて片ツ端から突いて見る。水深僅か一尺以内のところでのこと故、蛸君居らば直ぐわかる。見えなくとも手ゴタへで直ぐわかる。ステッキで突かれたら蛸君さつと怒つて、其ステッキに緊つかりとしがみつゝ突き方が酷いほど、棒にからみ付き方もひどいさまつて居る。其十分からみついた一瞬に、颯とステッキを引上げれば、呼賣が裏店の小供に賣る棒の先なる飴よろしくで、ステッキの先きに蛸奴、しつかりと自分でからみついて来る、そ奴を力任せに岩の上に逸早く投付けて扱て籠の内に拾ひ込むのである。尤も斯ふしつてとらるゝ奴は大抵小さなものである。

其小さな奴でも、よく注意すれば小さいなりに仕事はして居る、大い奴と同様往々磯の岩の上に匍ひ上つて居ることもある。殊に彼等には鳥賊ほどの『黒べ』がないから其代り保護色の變りが

頗る著しい、全體骨なしでアバレて廻はるもの

はそれ相應に利器もあるものかな。水に居る時は水色となり岩に據れば岩色となり陸に上つて小岩に憩へば其岩の色に即座に變る。従つて敵には殆んど見付からぬので得意になつて休息して居るところが往々ある、今一つの武器は前にも一寸いつた例の吸盤である。八つ足の各足に二條の並行せる吸盤の列がある。あれで以小さな貝なら握り詰めて殺して食つて終ふ。蓋の丈夫な貝なら、その蓋のところを吸盤を宛て、吸ひ出し窒息させて、氣息が絶え蓋が弛めばそろ／＼中實を頂戴にかゝるのである。

大きな奴になると、漁夫共も厭がる、屈強な男盛りの漁夫でも大きな蛸に片腕丈に捲き付かれたら大抵は往生する。それで漁夫共は沖の小島に上る際などは、先づ其船から飛び移るべき岩の面をよく檢視した後でなければ動かない。之は大抵蛸入道が岩の面に眼の球キラリと輝かし、全身岩色になつて岩に休んで居る危険が出る爲である。鰐や鮫が沖で船から漁夫を喰へて海に引込むこと

るのは誰も聞いては居るが此蛸の大きいのに
と、性がわるい。舐に手をかけて他の手で漁師を
捲き込むといふコソイことをする。元氣な漁夫は
逸早く權や桿をもつて、内に潜んで外から来る手
をイヤといふほど一氣にやつつけて、ひるむとこ
ろを此方からあべこべに抛り据えて捕獲して来る
さうである。

全體、海で性質のよくないのが、此蛸と鯛とで
あつて、何れも人を噛りたがる、だから海難の際
に第一に喜んで来るのが此二者である、潜水夫等
が引上げ工事や探索仕事などに潜り入つた時に厭
なの先づ此二者であるさうだ。殊に裸で潜り入
る海藻採りの海士などの働いて居る手に平氣で噛
み付きに来るさうである、殊に蛸に至つては夜陰
に乗じて、海濱近くの墓地などあると如何にして
知りしか、兎に角匍ひ上りて来て徘徊搜索するこ
とが往々ある。事情を知らない者は塙所が塙所故
随分震はせらるゝことがあるとのこと。何にして
も大きい奴はいろんなことをやる。君子は庖厨を
遠かる、嫁遠目傘の中、丸で知らないのも困るが

事によつてはあまり詳しくすぎるのが却て困ること
もある、これ以上の話は遠目にながめて居らるゝ
方が結構だと思ふのが、強ち蛸君ばかりでもある
まい。

石見の國は濱田の町と彼日本海々戰の砌敵の敗
殘特務船が漂着した地點との恰度中程に當るとわ
る海岸で、此二年ほど前の夏の或日、午後二時の
眞たゞ中に、非常な爆發があつた。誠に天地震動
する爆發であつた。村人は殆んど腰を抜かさんば
かりに仰天せしめられた。やつとのことで濱邊に
出て見ると、磯馴松の枝までが手ひどく引裂かれ
て居る、網納屋が横に抛れて傾いて居る、拾小舟
が寸断々々に千切れて居る、突出した巖角が大き
く裂けて微塵に碎けて居る、海には泥濁りが大ゆ
れに渦巻いて、魚族の仆れしものが波際にさへ散
亂れて居る。丸で大海嘯の跡のやうな光景である
更に驚かされたのは、其碎けた小舟の彼方に屈強
な男が一人、裸のまゝで仆れて居る光景であつた。
早速に駆け寄つて見れば見覚えある村の潜水夫
であつた。早や全く絶息して終つて居る、併し幸

なことに、全身に致命傷と見るべき重傷も負ふてゐない上に、まだ体温は少しはあるやうであつた。追々に寄り集つた人々の中に、氣の利いた者もあつて、人工呼吸法を施すこと殆んど一時間、幾度か駄目と諦めかけて尚ほ一縷の望を囁して盡力したる一時間の後に、やつと息吹き返して、運よくも復た此世界に蘇生つた、其潜水夫の直話を程經て聞いて見ると下の如くであつた。

最初は全く和布採り、方言でいへば目の葉採りに、單に出懸けて磯の巖角から徐ろに泳ぎ出て、潜つて入つて、七八尋から十尋前後の海底で、とある小岩を腰掛同様に身を凭らして、片手に他の巖角を握りて浮き上らないやうに身を扣へながら他の手の鎌で搔き切つて居る、其柄尻が自分の腰掛にドンと當つたが、何だか當りがやさしい。之は不思議だと殺急の場合よくは見なかつたが、今迄小岩と思つた眞黒なのが見る／＼眞赤になつて來た。同時に水夫の顔が眞蒼になつた、其矢先に早や足下の方の海藻の間から大きな眞赤な入道の手が上向いて現れて來た、氣も轉倒せんばかり

に水夫が、命から／＼逃げ出して泳ぎ上る、その後を、大蝸入道颯と出發して追かけて來る。双方全速力、水夫は逆もかなはない。唯入道の泳ぐや常に八脚を後方にして坊主頭の腹部を先頭にして居るから追付いても、直ぐ水夫を攫むことが出来なかつた爲に、水夫は辛うじてつかまらないで、磯近くに逃げ寄つた。慌てた九死の場合誤つて濱の砂場の方向に頭が向いたが最後、入道の手的一本が水夫の肩に懸つた、絶體絶命、藻掻きにもがいた其片腕が文字通りに藻を搔いて、引付けて小楯にとれば、何んでも直徑四五尺もあらむ一と束。之れ幸と蝸と己との前に此固まりを隔てに入た。此時、入道早速に、此換玉に其八脚でムンツと獅噛みついた。積もる鬱憤、目に物見せて呉れんの勢其換玉を縦横無盡に振り廻して居る入道を、後目にかけて、やれ助かつたかと逃げ出したまでは覺えて居れど、その後一切覺えない。病床で療養中から話されて我身が濱に打上げられたのを知つた位である云々。

こゝまでの口供と、濱邊の被害とにより、彼水

夫が苦しませ、れに小楯にとつた海藻の一本と見たのは、中實が随分堅い代呂物、その代呂物の處々に出ボがある、最初はイヤといふほど振り廻して居つた入道も熟々惟みればドウも人間共の珍重する金米糖であるらしい。獨りでやるには何だか惜しいやうだが、併し遠慮は開けた世の中に却て先方に迷惑を懸くる次第、イザ然らばと、八脚で緊平と抱えながら其の一角をカチリツとかぶりついたが最期、誠に天地顛倒の大爆發、それがドウやら世にも厄介千萬な浮流機械水雷であつたらしい追ひかけられた水夫は運よく助かつたが、強慾な蛸君は思ひ切つて散つてしまつたらしい。

料理

蒟蒻料理

石井泰次郎

◎味噌煮のこしらへ方

(原料) こんにやく一挺(東京製は長五寸、幅二寸三分、厚さ七分五厘、重さ六十匁くらゐ) 鹽

三匁胡麻油二匁、醬油二匁、白味噌二十匁、葱一本、かつを煎汁五匁、砂糖二匁、こんにやくを洗ひ、茶碗のふちにて押し、ちぎりたる如くに、小さくかきとりて鉢などに入れ、鹽を入れ合せて手にてよく揉み、水にてよく洗ひ湯鍋の中に入つし、五分間湯煮して箆にとり上げ湯を切り、布巾にくるみて、よく水をぬぐひおく。鐵鍋に、胡麻の油を少し入れて火にかけ其中にこんにやくを入れて、よくいため、次に醬油を加へてなほかきめぐらし、よく染みたるをふるして

網などの上にあげ置く。
白味噌を、搗鉢にて搗り、馬尾節の裏にのせて、木杓子にて漉し、葱を水にて洗ひ、小口切に薄く切り、これも搗鉢に入れて、すりくづし、鍋に、右のみそを入れ、葱を加へ、煮汁を入れ、木杓子にてとかし、砂糖を入れて火にかけ、こんにやくも合せ入れて煮る。ねぎも煮えたりと思ふほどにして、鍋をあらし、器に盛るべし。
又ねぎは搗りませず、小口切りにして、盛りたる上にのせても出すべし。